

## 河川・流域(8) (2-A-13-4~2-A-15-1)

本セッションでは、河川・流域(8)のテーマで6編の研究発表が行われた。このうち、海外における調査研究が4編(インドネシア1編, タイ1編, 韓国2編)あり、たいへん国際色豊かなセッションとなった。

インドネシアでの調査に関する発表は、北海道大学のグループによるもので、学術振興会により1997年以来行われているインドネシアとの拠点大学交流事業の成果である。熱帯泥炭地を貫流する河川 Sebangau R.の水質特性について、泥炭地開発の影響という視点から検討されたものである。タイの北東部に位置する Phong Watershed を対象とした研究発表は、GISを用いて当該流域における雨水の流出方向とともに集水域界を決定する手法について検討したものである。算定根拠として用いられている標高データが500mメッシュと粗い点などが議論になった。韓国からの発表は2編あり、いずれも自動車交通を発生源とする道路面からの面現負荷を取り扱ったものである。一方は、道路面上の堆積物が降雨によって洗い出される現象について模型実験を行ったものであり、降雨特性を変化させることにより、影響因子を検討している。もう一方は、道路面からの流出水进行处理するためのエコタンクについての検討であり、ポリプロピレン担体を用いた実験を実験室レベルとフィールドレベルの2つのスケールで行っている。SSで91~95%、重金属で76%以上、PAHsで66~97%の除去率が得られたとされている。

他の2編は日本国内における調査研究であるが、いずれも重金属汚染を取り扱ったものである。一方は、東京都内の道路面上と道路側溝に付設された雨水ますにおける自動車交通由来の重金属現存量と溶出特性について検討されたものであり、もう一方は、北海道豊平川における温泉湧出水に由来するヒ素の挙動と負荷量についてのものである。対象とされているフィールドが、それぞれ都市と郊外であるなど対照的であり、ユニークな討論となった。

筆者の私見ではあるが、最近の水環境学会誌掲載論文では、こうした水環境・フィールド主体の分野に比べて、水処理分野の比率が高いように感じられるものの、本年会ではこのセッション名の数字(「河川・流域(8)」)が示すように、水環境・フィールド調査分野の発表件数が多く、今後この分野の研究成果の實りを期待させられるものであった。

(立命館大学理工学部 市木 敦之)